



この国を変える福音

日本民族総福音化運動協議会理事
橋本バプテテスト教会牧師 平岡修治



この日本という国がいかにサタンの強力な支配下にあるかということは多くのキリスト者は知っています。そして、それに勝利をもたらすには福音しかない、ということも頭の中では理解していると思います。

しかし、私たちが口にする「福音」とはいったい何なのでしょう。そのことばの由来はどこからきているのでしょうか。「福音」ということばを私たちクリスチャンは日常茶飯事、さまざまな使用方をしています。福音派、福音主義、福音教会、福音的なメッセージ、福音宣教、十字架の福音など枚挙にいとまがないほどです。しかし、案外わかつていないようでも、理解できていないのも「福音」の特徴かもしれません。福音主義とはどういう立場に立った主義なのか。福音派とはどういうグループをさし、そうでない派との境界線は何なのか。福音的とはどういうことを言うのか。

正直言ってほとんどの人が明確な答を持っていないのではないのでしょうか。たとえば、答えることが出来てもその答に確信は持てないのではないのでしょうか。福音ということばが一人歩きし、ときには福音派ということばが自慢の材料にさえ使われることもあります。差別用語

にさえ変身することもあります。「あの人は福音的でない」「あのメッセージは福音が語られていない」などと。今回はこの「福音」について、みなさんといっしょに考え、その中からリバイバル、日本総福音化という大きなビジョンの鍵を採っていきたいと思います。

福音の聖書分布状況

まずは「福音」ということばから考えていきたいと思えます。「福音」(ギリシヤ語でユーアンゲリオン)という名詞、「福音を宣べ伝える」(ユーアンゲリゾマイ)という動詞の聖書における分布状況を調べてみると、たいへん興味深い結果をそこに発見できます。

「福音」ということばは新約聖書全体で百三十回使われていますが、このことばが福音書に出てくる度合いはパウロ書簡とくらべるとあまりにも少ないことに気づきます。ことに、ルカの福音書、ヨハネの福音書にはまったくでてきません。マタイの福音書、マルコの福音書にはわずかに、十二回しかでてきません。しかも、福音とは何かという、内容については一言の説明もありません。「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい」(マルコ一・一五)と

いうことばに要約されているようにイエス・キリストの宣教活動を表現するにとどまっています。

しかし、パウロ書簡には「福音」ということばが八十一回にもおよぶ数で使われています。さらに、福音の内容についても、具体的な説明、解釈が試みられています。その中心はイエス・キリストにおいて実現された神の救いでした。そして、「福音」ということばは、初代教会の宣教や使徒たちの働きの中で、育ち、成熟し、定着していったのでした。

聖書はなぜギリシヤ語で書かれているのか

それでは、この福音ということばはどこから生まれたのでしょうか。このことを考える前に少くも聖書についてお話しさせていたいただきたいと思えます。

新約聖書はギリシヤ語で書かれています。よく考えてみると、これはたいへん不思議なことです。イエス・キリストはユダヤ人として生まれ、弟子たちもユダヤ人でした。しかも、その宣教の対象もユダヤ人たちでした。なのに、新約聖書はギリシヤ語で書かれています。もちろん、アラム語で書かれたものがギリシヤ語に翻訳されたということも考

えられますが、一般的にはギリシヤ語で書かれたものとされています。これはたいへん奇妙なことです。なぜ、ギリシヤ語で書かれたのかを探っていくと、使徒の働き六章一節に「ギリシヤ語を使うユダヤ人」(ヘレニストと呼ばれていた)が急激に増え続けたことが記されています。「そのころ、弟子たちがふえるにつれて、ギリシヤ語を使うユダヤ人たちが、ヘブル語を使うユダヤ人に対して苦情を申し立てた。」また、その後で、問題打開のために「御霊と知恵に満ちた評判の良い人七人を選ぶ」ことになりましたが、この七人の名前はステパノをはじめ全員がギリシヤ語の名前だったことから、彼らもまたヘレニストであったことがわかります。このことから、新約聖書はヘレニストのために、ギリシヤ語で書かれたものであったことが推察出来ると思います。

しかし、旧約聖書はご存じのようにヘブル語で書かれたものでした。ヘブル語を話すユダヤ人(ヘブル人と呼ばれていた)には理解できても、ヘブル語を理解できないヘレニストにとっては信仰上、大きな問題でした。そこで、ヘレニストたちに用いられたのが旧約聖書のギリシヤ語版「70人訳聖書」でした。

70人訳聖書とは、エジプトの王プロトマイオス二世フィラデルフォスがアレキサンドリアの王室図書館を充実させるために「ユダヤの律法」である旧約聖書を取めることを考え、大祭司エレアザルに協力を求めました。エレアザルはイスラエルの十二部族から六名ずつ、合計七十二名を選び、翻訳に当たらせ完成したのが「70人訳聖書」でした。紀元前二四〇

年ごろのことであったと言われています。

もう一つの説があります。モーセがシナイ山で十戒を受け取るために山に登ったとき、七十人の長老が同行したことから、律法を全世界に伝達していく使命を負わされた者の象徴として、この名称が使用されたのではないかと考えられます。(出エジプト二四・一)

この「70人訳聖書」はヘレニストたちの信仰を成長させたのと同時に、福音宣教の舞台が異邦世界へと移っていくにつれ、重要な働きになっていくこととなります。現に新約聖書における旧約の引用の八十%が70人訳聖書からだということがわかっています。

「福音」の由来

「福音」ということばはどこから生まれたのか。その源流はどこにあるのか。それをたどっていくと当然のことながら、旧約聖書にたどりつきます。そして、すでに説明させていただいたギリシヤ語で書かれた「70人訳聖書」を見ていくと「福音を伝える」(ユーアンゲリゾマイ)という動詞が二十回、「福音」(ユーアンゲリオン)という名詞が三回でてきます。そして、その使われ方はさまざまです。たとえば、男の赤ちゃんが産まれたのが「よき音すれ」(福音)と言ったり(エレミヤ二〇・一五)、戦争に勝った知らせを「よき音すれ」と言ったりしました(一サムエル四・一〇)。また古代ギリシヤでは戦いに勝利したとき、そのことを伝えた使者に与えられた報酬を「ユーアンゲリオン」と言いました。ユーというのは「良い」アンは「使者」という意味

があります。

しかし、私たちが普通、理解している「福音」という意味にもっとも近い形で使われているのがイザヤ書に見られるバビロン捕囚からの「イスラエル解放の知らせ」でした。(イザヤ四〇・九、四一・二七、五二・七)

かつて、ソロモンは、事業を興し、隣国フェニキアのソロ王と通称条約を結んで貿易を行い、軍隊を充実させ、税制を定め、イスラエルはかつてなかったほど豊かな国になっていきました。しかし、栄華をきわめたソロモンの失敗は、外国から千人もの妃を迎え彼女たちの影響で異邦の偶像の神を信じることから始まりました。国は南と北に分裂し、弱体化し、同胞でありながら互いに憎しみ合うようになっていきました。紀元前七二二年北王国はアッシリアに滅ぼされ、南王国もまた紀元前五八六年バビロニアに滅ぼされてしまいました。偶像崇拜のもたらした結果は悲惨なものでした。

紀元前五五〇年頃になると、ユダヤ人の生活の中心はもはや彼らの国土パレスチナにはありませんでした。ユダヤ国土の破壊は凄惨なものでした。エルサレムは完全に陥落し、隣接していた民族エドム、アンモンがこの地を侵略しました。バビロニアにおけるユダヤ人の歴史については資料が少ないのですが、バビロニアで編纂されたエゼキエル書によって少しは知ることが出来ます。それによると、ユダヤ人は自分たちに与えられた居住地での生活はある程度自由が認められたのですが、彼らの心のよりどころ、またこの神への信仰は完全に否定されました。敬虔なユダヤ人たちはシオンを思い

起こして涙を流しました。時がたつにつれ、多くのユダヤ人はエレミヤの忠告を心にとめながら、バビロニアの環境に生活を適応させ、七十年の捕囚の生活を送ったのでした。

一般に、当時の人々は戦争に負けることは、相手の信じていた神に、自分たちの神が敗北したと考え、自分たちの信仰を捨て、相手の神を敬うことになっていきました。しかし、ただ一つ例外の民族、それがユダヤ民族だったので。彼らは、自分たちの神が負けたとは考えず、自分たちの不信仰がこのような悲惨な結果をもたらしたのだ、と考えました。たとえ、自分たちの体は奴隷になっても、決して信仰だけは譲歩しませんでした。そういう考え方に立っていたユダヤ人でしたから、とりわけ安息日問題は深刻な問題でした。激しい戦いの中、彼は命がけで安息日を守ろうとしたのでした。そして、彼らのほとんどの人たちはバビロニアでの生活は仮のものだと考えるようになっていきました。

やがて、バビロンにとらわれの身となっていたこの民に、解放の音すれが宣べ伝えられたとき、この知らせがどんなに大きな喜びの音すれであったのかは想像できると思います。バビロニアはペルシヤ王クロロスに征服され、クロロス王はイスラエルの民をユダヤの地に帰還させることにしたのでした。この知らせが「福音」「良き音すれ」だったので。

「良い知らせを伝える者の足は、山々の上にあつて、なんと美しいことよ。平和を告げ知らせ、幸いな良い知らせを伝え、救いを告げ知らせ、「あなたの神が王となる」とシオンに言う者の足は。聞

け、あなたの見張り人たちが、声を張り上げ共に喜び歌っている。彼らは、主がシオンに帰られるのを、まのあたりに見るからだ。エルサレムの廃墟よ。共に大声をあげて喜び歌え。主がその民を慰め、エルサレムを贖われたから。主はすべての国々の目の前に、聖なる御腕を現した地の果て果てもみな、私たちの神の救いを見る。」

イザヤ五二・七〜一〇
すなわち、イザヤ書で語られている「福音」「良き音ずれ」とは「解放」のことです。「福音」「良き音ずれ」とは「霊的解放」なのだということを聖書は明確に伝えていきます。

ユダヤの民が捕囚の地バビロンから解放されたように、サタンの手から解放される、それが「福音」なのだと言っているのです。つまり「サタンの支配」から「神の支配」に移される。そのことを主は「時は満ちた。神の国は（神の支配）は近づいた」（マルコ一・一五）という宣言で表現したのでした。

神から離れた人々は、確かにサタンの奴隷になっています。そして、罪の支配下におかれ罪の奴隷になっているのです。そこから解放されていく、霊的な解放そのものが福音なのです。

パウロの福音理解

すでに述べましたが「福音」「福音を宣べ伝える」ということばの大部分がパウロ書簡に集中しています。そして、この使われ方を検証していくと、イエス・キリストの十字架の死と復活がその中心になっていることがわかります。さらに、パウロ書簡の中心的なテーマは十字架と復活といっても過言ではないと思いま

す。

福音書を読んでいきますと、その記事は十字架と復活のことだけでなく、キリストの愛のみわざ、奇跡、教えなどがその大部分をしめています。しかし、なぜパウロは、福音の内容を十字架と復活に集中させたのでしょうか。

パウロの福音理解にはバビロンからの解放を背景にした霊的解放についてはほとんど触れられていません。むしろ、意図的に背後に隠されたのではないかと思えるほどです。なぜ、彼はこのことをはっきりと言明しなかつたのでしょうか。おそらく、パウロは別な表現で福音と解放のことを伝えようとしているのではないのでしょうか。そのキーワードが「贖い」ということばかもしれません。「贖い」ということばを探っていくとき、「解放」と密接な関係があるのに気づきます。さらにその事が「福音」につながっていくのです。

あがないの意味

十字架と復活は私たち人類を贖うためでした。贖われるということにはどんな意味があるのでしょうか。私たちはあまり深く考えもせずに贖いということばを使います。確かに聖書は「あなたがたは代価をもって買われたのです。人間の奴隷になつてはいけません。」（一コリント七・二三）と語っています。

旧約聖書で使われている「贖い」ということばは三種類のことばが使われています。一つはガリアル、あとの二つはバスターとガーファルです。詳しい説明は省かせていただきますが、ガリアルとバスターには本来「解放する」という意味

があります。ガリアルは出エジプトの時の解放やバビロン捕囚からの解放のときにもこの言葉は使われています。

「わたしは主である。わたしはあなたがたをエジプトの苦役の下から連れ出し、労役から救い出す。伸ばした腕と大いなるさばきとによってあなたがたを贖う。」
出エジプト六・六

「あなたが贖われたこの民を、あなたは恵みを持って導き、御力をもって、聖なる御住まいに伴われた。」
出エジプト一五・一三

「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。」イザヤ四三・一
すなわち、ここで使われている「贖い」は「良き音ずれ」と同様、解放の意味で使われているのです。

バスターは身代金を払って敵の手から贖う場合につかわれました。しかし、イスラエルの神が敵に身代金を払うわけがありませんので、ガリアル同様、神学的には「解放」を意味していると考えられています。

新約聖書では贖い（アポリュトローシス）は救いと同じ意味で用いられていますが、使い方はきわめて旧約聖書の手法と似通った使い方がされています。この「贖い」のギリシャ語の語源リュトン（身代金）は奴隷を買い戻すときに使われました。聖書ではこの言葉を、罪の中から「解放される」として「神のさばき」から免除される意味で使用しています。

もう、おわかりになったのではないかと思います。「福音」「贖い」は罪からの解放、律法からの解放、サタンの支配か

らの解放を表現していることばなのです。

「よい知らせを伝える者の足は山々の上にあつて、なんと美しいことよ平和を告げ知らせ、幸いな良い知らせを伝え、救いを告げ知らせ」あなたの神が王となる。」とシオンに言う者の足は。」
イザヤ五二・七

これはバビロンにおける捕囚からの解放を告げることはでしたが、パウロもまたロマ書の終わりにおいて、同じ賛美を叫んでいたのです。全地の民に対する解放のおとずれを、彼は福音として宣べ伝えたのでした。

すばらしい霊的解放をもたらしてくる福音を恐るべき差別思想や偏見の中に閉じこめるとき、思いもよらないように結果をもたらしたことは歴史も語っています。わたしはこのことを恐れます。

「福音」についての正しい認識と理解をし、本当の意味で福音に生きる者になりたいと思います。単なる組織や教理上の福音派でなく、すべての人に良き音ずれを伝える真の福音派になっていきたいと思えます。

今、私たちの国はバビロン捕囚のとき以上に、多くの人たちがサタンの奴隷になり、偶像崇拜、姦淫、不貞行、憎しみ、分裂、ねたみ、怒り、争いなどの罪で覆われています。人々をそこから解放するには福音しかありません。この霊的解放こそが福音であり、日本総福音化を産むものなのではないでしょうか。霊的解放の向こうにリバイバルの足音、総福音化の喜びの声が聞こえてくるような気がします。